

特42

991





板倉候へ差上

御紋舟
賜り
又此程ハ
十六丸の
女を權
妻とし
寵愛せ
との識子
老人あり



岩代國福島十丁目旅人宿
岡崎伊六八十余女老有福
暮し常の事一こみ鶴を
飼置是を愛し鼓を
まて雀の庭前ゆき舞を
まよまて餅のやまき時
當ち老人の袖をひく
有様長生の端相と
知られ多り土まての時
王子を加へ来て耶五渡
其王子を二ツ
切て盃とほし

今只
東京の
親族へ送る
かる目出度
翁おれハ此程
御巡行の
時菊の

東京新富座の立者

尾上菊五郎の送り

長七とらへ休座の

はれぐり浅草

奥山の撃釘會

お行て手あこの

程を×

兄せん

そのと

友達引

連れ大手を

ふつて宛りまへ

あー一本筋うと



① 起きもあつてあつ

しげ解酒し

友達不介抱

これかろいふ

這起きて

青葉茶

志保

引連

ゆけまの相手不

出ーハ十七ハの

別品由へ太刀討

とらへあつてまへ

総討せんと思ひーか

ヤット声くけ

上段下段討合

太刀風梅香の

長七先生下段不

月をつけ突出を木刀を

右手ふちろひ面下エイト

一本つこれ大先生の真仰向





若松縣下
南淵山
山の
木の手
理む
庵室 小川村某の

抱きかか
るうー
有ゆふ刺水で



あこち
とて心
女さふ門はうらがたさんか
せんらと小思おろし
わうえーうらなぬ健康
たのまう生人サ
まひ今夜の
おおあまの
ゆへ焼
倒れを
差よつて

ふけ
おつ
生体
村の
お殺
酒の
る

越前の国又井郡犀川ハ出水のほとり碎れ魚梁
吹かれ柳も水もあふみぬれてまことたゞ同業

三月月形の髪櫛お買うま

あけてお買ひを

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ



まじり小里連て

りて正西のおま

偽と偽名の字田所

まのこまあもめん

あつては

どろろ大バ

まを

買つて

よこ

ひきりお

引緒ハ令

を延せ

よるん

井ひ言

たまり

まじり三味を

うけとる

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

お買ひ

明治十年五月石川縣



東京
吉原町
住貨渡世
甲中傳兵衛
姪がらく八年十九の
ホツ子ヤリ娘様とこれ髪女の

賊ハ賊
凡呂敷色
を赤
捨て跡
白浪と
途



江戸
ちんちん
盗人ハ
起上り見ね
大男
おら
女と
泥坊

明治十
年六月
十五日の
とら
とら



東京深川富岡町
住居のんまおんを
お貸子の藤林と
指合の標合
口傳の指先
おろーお
中そのうふ
吟町の
孫三進と
指合ゆ
下夜の
その下をのんを

取調の三人
と十徳の
贖罪金で
車ゆ
とま



振事一と目を
むきおし 渡町へ
途中出合がらふ
巫進と三言三書
左ての双方
目今討
来りるお春の
マアまの
おの
桂木ま
不破お名古屋も
月々同志果
あま時巡査お引れ

芳春筆



小説世新聞集

考者函

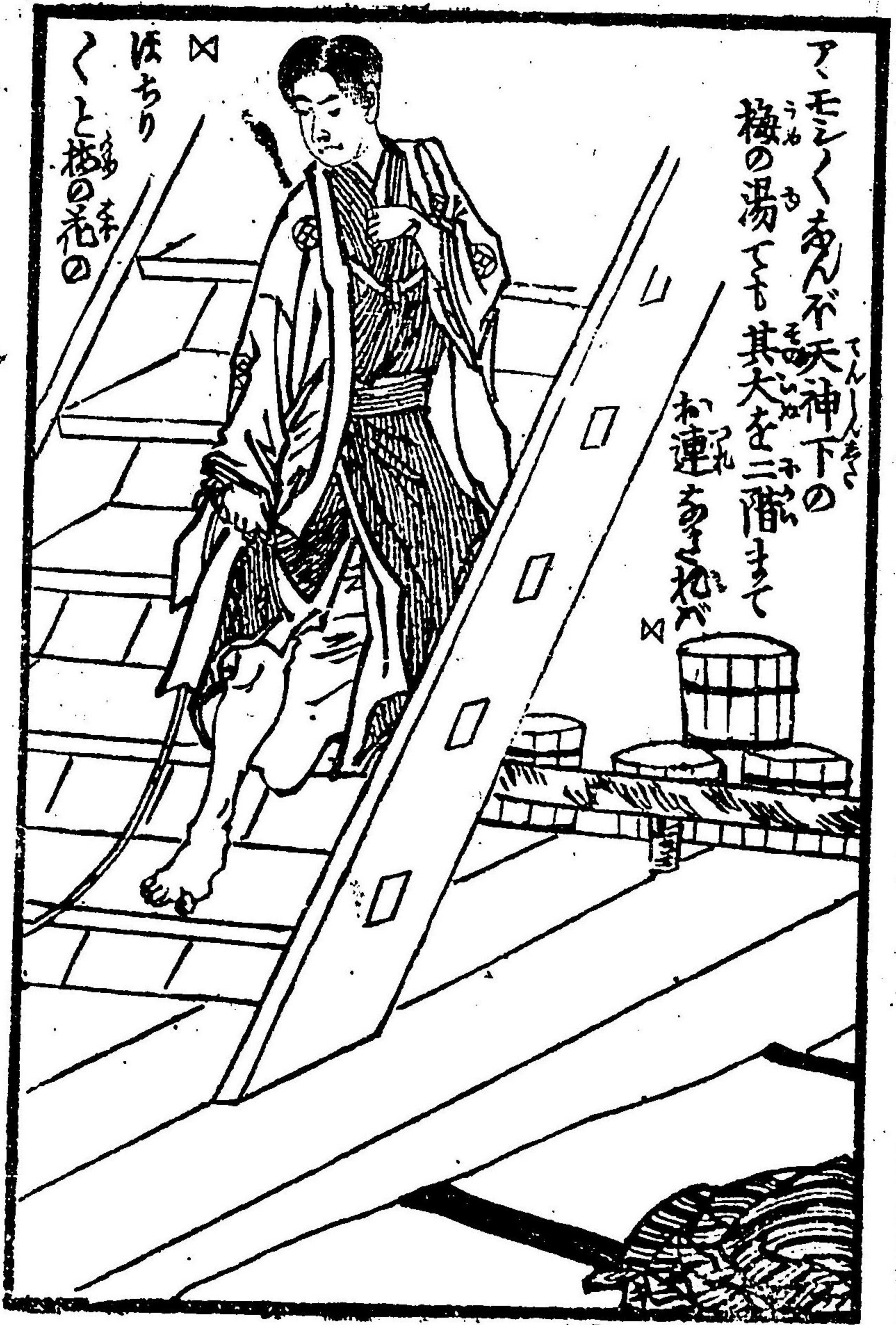
明治十年十二月五日御届

御届書三頁目録書

編輯出版人 野玉彌七



足跡といふ真平は色をさへ
 井と信る主人をにんご
 コロヤク此方へ本はか住ま
 江戸族様だもの美切の
 下へおと 罷あつて
 苗をさるば二階へす
 森六着御おきませ
 其のちり湯あつたを
 鳴りの響くを
 料の使湯屋で
 計りたの孫を
 中御礼の明治十年三月二十日の事



アモシくあんな天神下の
 梅の湯でも其大を二階まで
 お連あつた
 ぼちり
 くと梅の香の

コロヤ 此横濱の格別
 貴族の禁制の
 也布告もまじびり死
 行へぬつて右よある
 美をあらまそいかく
 未廣丁小住居のこま
 石渡色之助の妻十代と
 中村をこ前赤京赤
 ての仕も川なす
 たるれど返とのふ仕合
 支るさ眼病のそは程
 月々向より八割の得も



女のいひつ
 夫の對言訣
 もはらへては
 ははの眼病治
 る久の我血を捨て
 言ひせんと
 心全まび
 ひと
 まい人の
 神引
 りんをま
 れごめさ
 たらふ中おた

病氣はらひ
 美人はへ
 葉やし
 産てい
 宛の
 米や
 足る
 はこれの
 目
 志
 口
 体
 人



とかめ
 まま
 の表と
 有去の人の
 送り
 己
 を破らぬ



新編 源氏物語
御木町
土屋の家根子
腰の骨の痛みは横道
の痛みは横道の
一歩を歩くと
御木町の



大原直三郎と十太と三四の夜
上り鉄食もまた世婚の橋を花巻の
二階へ通す
春華

大原直三郎
酒喰の御足
左の罰金を
中を
を



陸中四言下中巻後某とらう

一人の欲強信者ハ大金を

とらふんと岩山山の麓を

金比羅神ハ大願をまけ

白き行衣をぬきまき

懺そく三年寝中のいふに

夜ふく通ふ半満時

岩小見ふれー 弱大也

木の乃 ころころ

月ふけ金箔押の眼玉の赤いふり

倒るるまをづく様格もけて

あふりく 西のや様

枯るる山風流よと

繪

おん

社

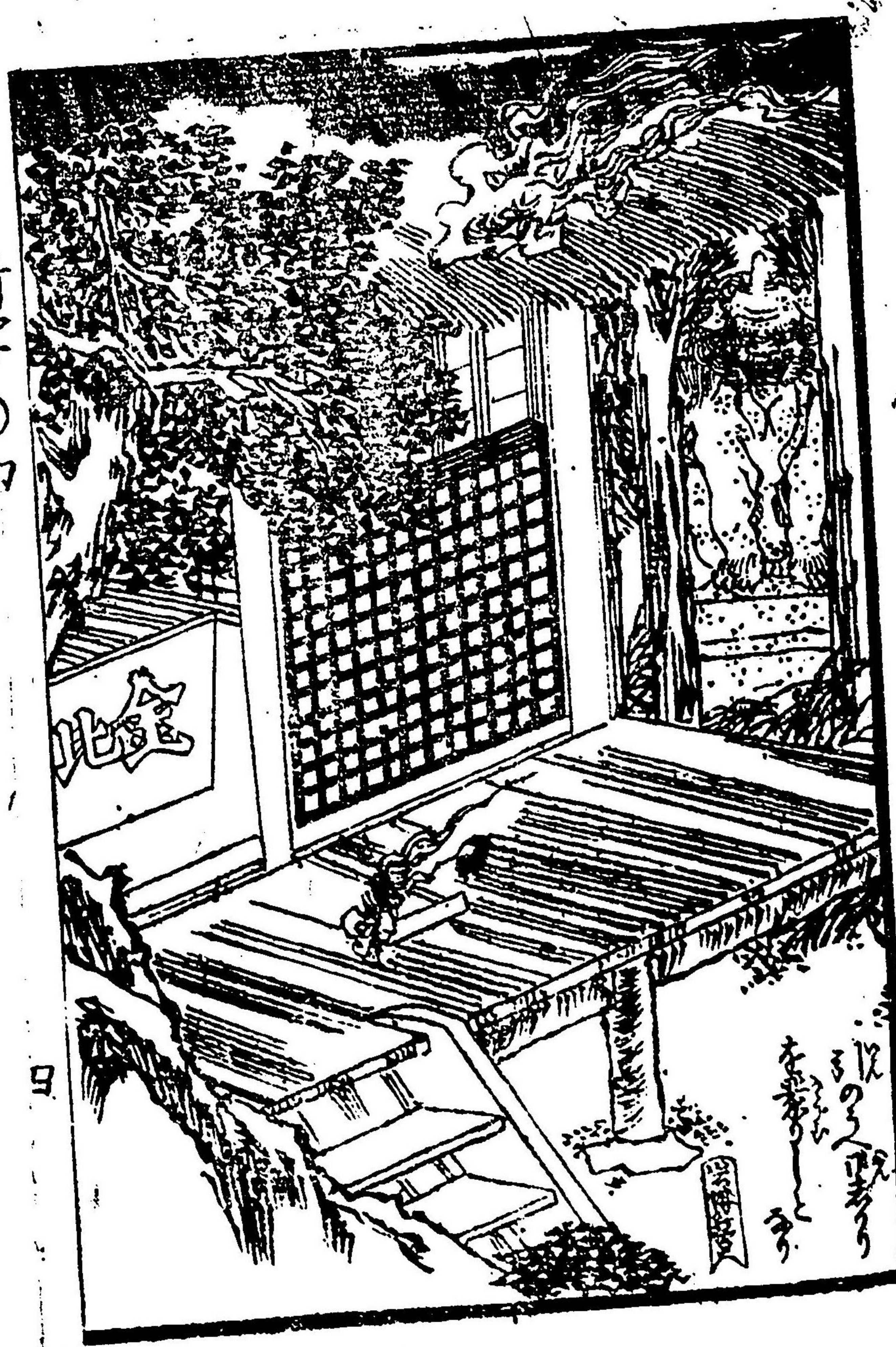
社

社

社

社

社



おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい

おのりい



本町の物町
大塚金太良ハ
日三ツ目の
芝居の出るこの
頭を勤め極の
勇も勝れぬとのハ
病を明治十年十月三日
ほいお空〜〜とありながら
妻子親のいハ言及及
にきりこぎ〜と換をさく
子分子方ルありつゝ
通夜をあり〜酒〜ちの
お方の華武ハ留せ講お相念仏

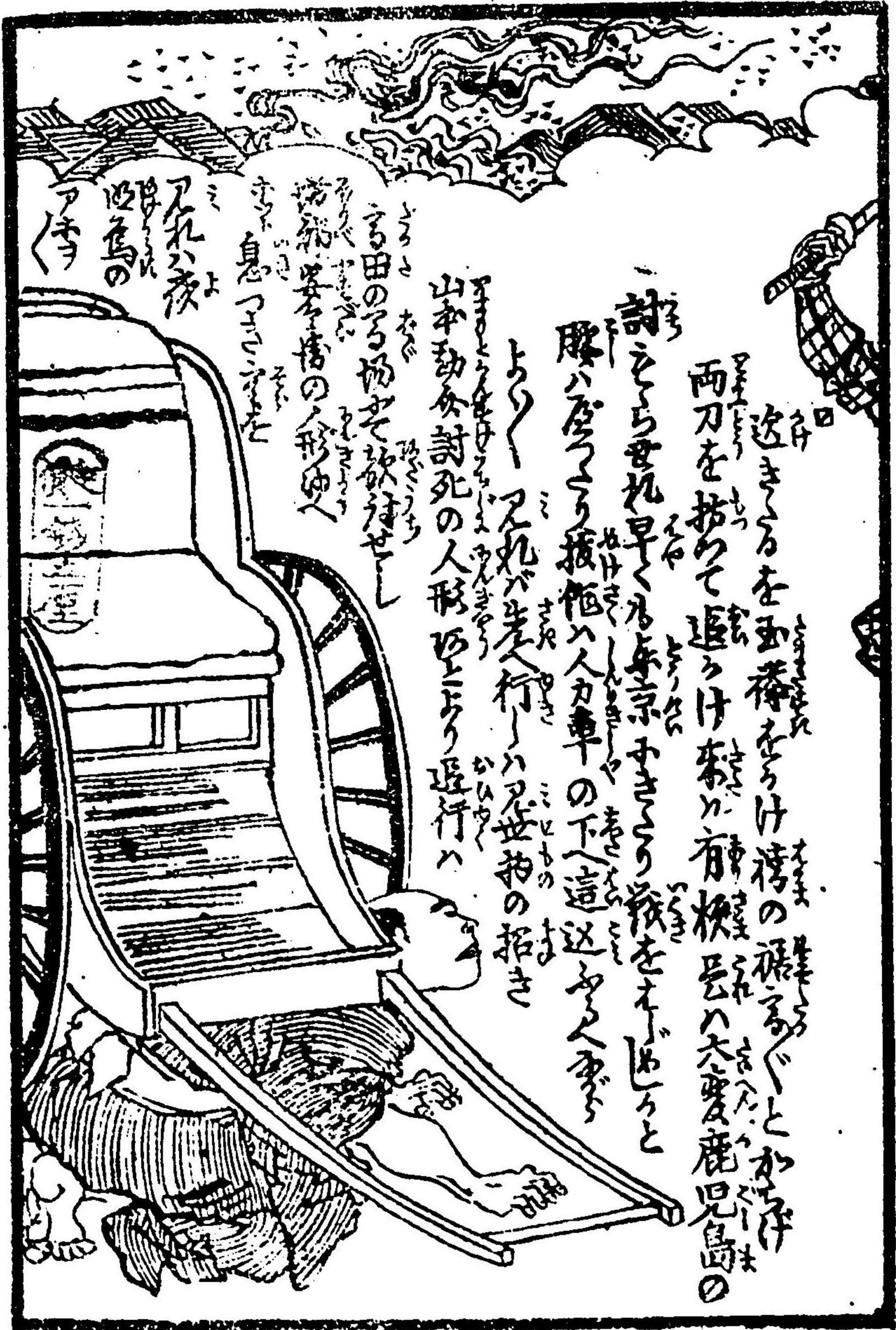


おは是月町内の頭あきやりを
おは通勢のよ〜と本で
押出そうと相談最中
早桶ハ〜と出出し
〜と金太良
〜と化と親方ハ
蘇生つ〜と夜をさく
逃出ま通夜僧法を笑す
大さ〜金太郎ハ養生を
日柄〜と心能追〜
全杖〜し子分を集め
祝ひをあり〜三ツ目の芝居ハ
再勤あす〜

目出度座
今〜
〜
〜



神田花園丁の出来
 の時半後でとくは
 湯やけ腹で送るや
 美代橋を去
 渡り向ふを
 足れバ
 血やまされし
 大坊主白布
 て拜せ
 血刀
 おつて



返まゝるを玉禱をうけ禱の禱さぐとわが
 両刀を拵りて返りけ頼り有様
 討てられ早も年宗おまきり
 腰にさすり振極へ人カ車
 山本勘助討死の人形
 田のうら物
 湯船
 息つ
 足れバ
 湯船の
 阿侍



東京府立図書館

新門部

厚

三類

函

十棚

全七二〇二号

TOKYO IMPERIAL LIBRARY



特42

991

091949-001-1

特42-991

[絵本]

大橋堂

M10-17

DBP-0073

